

## 入退院を繰り返すパーキンソン病患者の主介護者の思い

東口亜耶<sup>1)</sup> 永田りん太郎<sup>1)</sup> 吉村千鶴<sup>1)</sup> 古田道枝<sup>1)</sup> 矢島玲子<sup>1)\*</sup> 奥田玲子<sup>2)</sup>

1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 2 病棟

2) 鳥取大学医学部保健学科看護学専攻基礎看護学

## Thoughts of main caregivers of Parkinson's disease patients who are repeatedly hospitalized and discharged

Aya Higashiguchi<sup>1)</sup>, Rintaro Nagata<sup>1)</sup>, Chizuru Yoshimura<sup>1)</sup>, Michie Furuta<sup>1)</sup>,  
Reiko Yajima<sup>1)\*</sup>, Reiko Okuda<sup>2)</sup>

1) The 2nd Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

2) Fundamental Nursing, Division of Nursing, School of Health Sciences,  
Tottori University Faculty of Medicine

\*Correspondence: byoutou2@tottori-iryō.hosp.go.jp

### 要旨

本研究は、入退院を繰り返すパーキンソン病患者の主介護者が、どのような思いで在宅介護を行っているのかを明らかにすることを目的として行われた。在宅療養をしながら、2回以上の入院歴があるパーキンソン病患者3名の主介護者3名を対象とし、自作のインタビューガイドをもとに半構造的面接法にてインタビューを実施した。そのデータを収集・分析した結果、11個のカテゴリーに分類され、以下のことが明らかになった。

1. パーキンソン病の発症により、主介護者の年代によって日常生活の変化や負担の内容は異なるものの、主介護者の家族の生活、生き方に少なからず影響を及ぼした。
2. 主介護者は、患者に転倒して欲しくないという思いで日常生活をサポートする中で、リハビリ訓練の重要性を感じた。
3. デイサービスなどを通じて外部との交流を保つことで、患者と主介護者ともに、身体的・精神的な負担を軽減できた。
4. コミュニケーションにより気持ちを伝え合うことにより、主介護者に嬉しい感情をもたらした。

鳥取臨床科学 9(1), 9-14, 2017

### Abstract

The objective of this study was to elucidate the thoughts that the main caregivers of Parkinson's disease patients who are repeatedly hospitalized and discharged have regarding home-care. The subjects were three main caregivers of Parkinson's disease patients who had a history of having been hospitalized at least twice while receiving home care. Semi-structured interviews were conducted using an interview guide that was created by the researchers. After collecting and analyzing the data, it was organized into 11 categories, which allowed the following to be elucidated:

1. Although the specific changes to and burdens experienced in daily life as a result of the onset of Parkinson's

disease differ depending upon the age of the main caregiver, the disease has a major impact on the activities and lives of the main caregiver's family.

2. Main caregivers feel the importance of rehabilitation training as a part of support provided to daily activities to prevent the Parkinson's disease patient from falling.

3. By maintaining interactions with the outside world through day services, for example, both patients and main caregivers are able to reduce their physical and mental burden.

4. Communication of their feelings to each other brought happiness upon main caregivers.

Tottori J. Clin. Res. 9(1), 9-14, 2017

**Key Words:** パーキンソン病, 在宅介護, 主介護者, 半構造的面接法; Parkinson's disease, home nursing care, main caregiver, semi-structured interview

## はじめに

パーキンソン病は、厚生労働省より「特定疾患」として指定されている神経難病の一つであり、L-DOPA をはじめとする薬物療法やリハビリテーションにより、比較的症状の改善や症状悪化の遷延を図ることが可能となり、数十年にわたる療養生活を送る患者が増加している。しかし、根治が望めないため、緩徐ながらも病状は確実に進行することから、患者・家族の生活への影響が大きい。

平成 27 年度、B 病院 A 病棟ではパーキンソン病の入院患者（関連疾患含め）が 36 名あり、そのうち自宅に退院した患者が 12 名で、約 3 割を占めていた。自宅退院した 12 名の患者の半数は、入退院を繰り返しており、activity of daily living (ADL) の低下を伴う患者が多くを占め、自宅療養を送る上で家族の手助けが必要不可欠な状況と言える。

退院後の在宅生活や介護について患者及び家族と検討し、入院中から指導しているが、退院後に、自宅での生活の様子や在宅介護について患者及び家族に話を聞く機会がない。また、入院中に患者本人のみ、もしくは患者同席の上で家族と話をすることはあるものの、家族だけに対して話を聞く時間がなかなか作れていない。

そこで今回、入退院を繰り返すパーキンソン病患者の主介護者が在宅介護する上での思いや、病院側へ求めること、日々の援助状況を、インタビューを通して明らかにしたい

と考えた。

## 用語の定義

主介護者: 在宅療養するパーキンソン病患者と同居する家族の内、主となって介護をする 1 人。

入退院を繰り返す: パーキンソン病のリハビリテーション、もしくは薬物調整目的で、B 病院に 2 回以上入院したことがある。

## I. 研究方法

### 1. 研究対象

現在、B 病院の外来に通院しながら自宅療養をしており、かつ、A 病棟に入退院を繰り返しているパーキンソン病患者 c, d, e 氏 3 名のそれぞれの主介護者 C, D, E 氏 3 名を、同意を得た上で対象とした（表 1）。

### 2. 研究期間

平成 28 年倫理審査承認後～平成 29 年院外発表論文受諾まで。

### 3. 研究場所

B 病院 A 病棟面談室。